
嘘と上書きと宇宙人

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘と上書きと宇宙人

【Nコード】

N5597S

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

自称・宇宙人の友だちは、とんでもない嘘つきだ。いや、嘘つきのままにしてみせる。

(これはピクシブ、ノベリストにも載せたものなので転載したものです)

嘘つきが泥棒の始まりだと言うのなら、おれの友だちはとっくにネズミ小僧かルパンになってるんじゃないだろうか。

「黙ってて悪かったけど、僕、宇宙人なんだ」

如月のこの宣言を聞いたときにこんな考えが浮かんだおれは、我ながら妙に冷静だったと思う。慣れたものだ。

おれのリアクションが鈍いのを意外に思ったのか、隣を歩く如月はわざわざ一步前に出ておれの表情を覗き込んでくる。

「渡辺くん、話聞いてた？」

「ああ。おれはてつきり、おまえがネズミ小僧かルパンなのかと思つてたからさ、意外だったよ」

おれの返事は如月にとって意外だったようで、大きくまばたきをしてから言う。

「渡辺くん、君つてずいぶんおかしなことを言うんだね」

「おまえにだけは言われたくないね」

おれたちは互いに顔を見合わせたあと、ほとんど同時に吹き出した。

如月はよく、自分が総理大臣の隠し子だとか3分先の未来を見ることができるだとか、他愛のない嘘をついた。

人当たりがよく、成績もいい優等生の如月が真顔でこんなことを言うものだから、最初は電波クンなのかとひどく面喰ったものだが、すぐにわかった。

如月は冗談を楽しんでいるのだ。

おれは「おいおい冗談だろ」なんて水を差すことはせず、如月の嘘を真に受けたような反応をしてはごっこ遊びに興じた。

「僕、実は総理大臣の隠し子なんだ」

「マジかよ！じゃあおれ、あれだ、サインほしい」

「渡辺くん、君って本当に欲がないねえ。いいよ、サインの100枚や200枚、貰ってきてやるうじゃないか。部屋に飾って家宝にでもしてくれよ」

「ふふん、そんなみみっちい使い方するわけないだろ。もちろん色紙に、じゃない。借用書に頼むぜ」

「渡辺くん、君って本当に欲深いやつだな」

「さっきと言ってること違うぞ、如月」

といったように、如月の唐突な「宣言」はごっこ遊びの開始合図なのだ。

学校からの帰り道をたどるおれたちの頭上からは、すでに太陽は退散し、夕焼けの名残だけが空の青さを留めていた。1等星はもう光り始めている。

「おまえ、どこの星から来たんだ？」

おれの質問に、如月は深く考えるわけでもなく、あの星だよと指さした。

「地球には、仕事で来たんだ」

「仕事？」

「そう。地球の様子を報告すること。言ってみれば、スパイってやつ」

「スパイがこんな普通の町に？国会議事堂とか軍事基地とか、もつとそれっぽいところに行かないと仕事にならないだろ」

「わかってないなあ、渡辺くん。こういうフツラの町で生活してみることですの星の雰囲気掴むんだよ。現に、観光客だって国会を見に行くわけじゃない。普通の人たちが生活している場所に行つて、その国の風土を肌で感じる。そうでしょ？」

「おまえの情報収集つて、観光と同レベルかよ」

「地に足の着いた、堅実な仕事だと言つてほしいね」

突拍子もないことを言いだすわりに、如月の価値観は庶民的だ。そ

んなギャップが妙に微笑ましくて、おれは自然に笑顔になっていた。だから、如月の次の言葉に、すぐには反応できなかった。

「でも、もうお別れなんだ」

如月の横顔を見た。ただ前だけを向いていた。おれと目を合わせないようにしているように見えた。

「・・・お別れ？」

「ここでの仕事は、もう終わったんだ。これからまた別の場所に行く。ここにはもう、戻ってこない」

如月の口ぶりは教科書の音読のように淡々としていて、事実を伝えることだけに専念しているように見えた。

これは冗談だ。そうだろ。

だっておまえはおれと同じ地球人で、同じ高校通って、お互いのことだってそこそこ知ってる。

おまえは真面目な顔でふざけたことを言うやつだし、ときどき本気が冗談なのかよくわからない言い方をする。今みたいにな。

なんで、こつちを見ようとしな。言うことあるだろ。

やだなあ、嘘。冗談だつてば。

如月のそんな言葉を待っていないながら、おれは確信していた。

いくら待とうと、そんな言葉が返ってこないことを。

如月は前を見つめたまま、「これから言うことは別に信じなくてもいい」と前置きしてから話した。

「仕事の都合でね、いろんな場所を転々としていると、よく思うんだ。みんな、自分の日常から離れていくものを、長くは覚えていられないって。

お別れるときに寄せ書きをもらうこともあったけど、みんな示し合わせたみたいと同じことばかり書いてるんだ。如月くんのこと忘れないとか、ずっと友だちだよ、とか。でも、それを今でも実行できてる人っていないんだ。笑っちゃうよね」

あはは、と如月は声をあげてみせた。何かが崩れてしまうのを、なんとか保とうとしているように、おれには映った。

「笑って、そのあと放り投げたくなる。嘘つきってなじりたくなる。みんな、自分が書いたこと忘れてる。もらった僕だけが覚えてるんだ。いやなんだ、そういうの。いつまでも縛られてるみたいで、虚しいんだよ」

そんなことない。おれは、その一言を言うことができなかった。

今ではどこで何をしているのかわからない「友だち」がたくさんいることも、そいつらのことを思い出さないことをとくに不思議に思わないおれがいることも、全部本当のことだからだ。

「上書きされちゃうんだ。新しい友だちとか、出会いとかにね。そして僕と過ごした時間はもう更新されない。仕方ないよね。離れちゃうって、そういうことだもんね。わかってる。わかってるんだ」でも、どうしても慣れられない。如月はそう言って、また笑った。

「言ってること、おかしいでしょ。どうして笑わないの？」

「なんでおまえは笑うんだよ」

如月は嘘つきだ。楽しいわけじゃないのに笑うし、つらいと思ってるくせに平気そうなふりをしてみせる。

「渡辺くん。君って、やっぱり変なやつだな」

如月はおれの表情を覗き込むと、さびしそうに笑った。

「変で、不器用で、すごくいいやつだ」

「おまえにだけは言われたくない」

おれの言葉に、如月は笑った。

笑ってばかりのやつだけど、この笑顔だけは本物のような気が、たしかにした。

「さて、最後に渡辺くんに魔法をかけないとね」

「魔法？宇宙人じゃなかったのか」

「科学だけで広い宇宙を渡っていけるなんて考え、古いよ。魔法の方がお手軽だし、夢がある」

如月はよくわからないことを言うと、おれの額に人差し指を一本当てた。

「君は、僕のことを忘れる。話したことも、過ごした時間も、全部

忘れる。もう、思い出すことはない」

如月は言い聞かせているようだった。おれに、ではない。たぶん、如月自身に。

「こんなことをするのは、おまえが宇宙人だからか」

「そう。宇宙人は、関わりのある地球人から自分に関する記憶を消すのさ」

「おれが忘れたとき、おまえが納得するための予防線なんじゃないのか」

如月の目が大きく見開かれた。

「なめんな！」

おれは渾身の力を中指に籠め、如月の額に開放する。早い話、おもいきりデコピンしてやった。

痛みに悶絶している如月に、おれは言っただけだった。

「おれはたしかに頭悪い。ああ認める。よく赤点取ってはおまえに勉強教えてくれて泣きついてたもん。でもな、なんでも忘れると思っただけ大間違いだぞ」

痛みに涙目になっている如月は、それでもおれを見ていた。

「突拍子もないこと言いだすわりにすごく庶民的なやつのこと、冗談がわかりづらいやつのこと、作り笑いでおれを騙せた気になつてるやつのこと、どうしようもなく嘘がへたくそなやつのこと、おれはこの先もずっと覚えてる」

忘れない。おれのこの言葉と、如月の目から涙がこぼれたのは同時だった。

「・・・どうしようもない知り合いがいるんだね、渡辺くん」

如月はしばらくしてから、ぽつりと言った。

「ああ。本当に、どうしようもないやつだよ」

「そんなやつのこと、どうして忘れないって言えるの」

如月の問いかけに、今度はおれが笑った。

「友だちだから、なんだろうな」

おれはたしかに頭が悪い。気の利いたことは言えないし、みんなが

笑える冗談も言えない。

でも、おれが言ったことに嘘はない。それだけは、自信を持って言える。

それは如月のかけた「魔法」にも、時間とともに上書きされていくたぐさんのことにも負けない。

如月は、長いこと黙っていた。うつむいた横顔からは、表情を読み取れない。

そして、ふいに顔を上げると、挑戦的に言い放った。

「それじゃあ、対決だ」

「対決？」

「そう。宇宙人と地球人、どっちの言ったことが正しいか」

「嘘つきはどっちかを決めるってことだな」

「自信ない？」

「あるよ。おれは負けない」

きっぱりと言えた。おれのすることがわかった気がした。

おれは、如月を嘘つきのままにしなきゃならない。如月のかけた魔法、絶対に実現させたりしない。嘘っぱちのままでもいいんだ。

いつの間にか曲がり角まで来ていた。ここで如月と別れ、違う道を一人で行くことになる。

「じゃあね、渡辺くん。健闘を祈るよ」

如月は明るく言うつと、おれに背をむけて歩き出した。

「なあ、如月！」

おれは遠ざかっていく如月の背中に向けて、叫んでいた。

「おまえ、おれに勝ってほしいか？」

如月は立ち止まった。そして、一度振り返ると、何も言わずに走りだし、すぐに見えなくなった。

星が見えるほど暗かったけど、おれはそのとき、如月がたしかに笑ったような気がした。

翌日、担任から如月が転校したことを告げられた。親の転勤だと言
う。

仕事って、親のじゃねえか。やっぱり、如月は嘘つきだ。

君は、僕のことを忘れる。話したことも、過ごした時間も、全部忘
れる。もう、思い出すことはない。

如月の「魔法」が、ふとよぎった。

大丈夫。おまえは嘘つきだ。おれが、その魔法を嘘のまま、冗談の
ままにするから。必ずするから。

如月の母星だという星めがけて、おれは中指をはじいた。

(後書き)

さよならはやっぱり悲しいことだと思いますが、できるかぎり前向きにとらえてみました。感想いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5597s/>

嘘と上書きと宇宙人

2011年10月8日03時10分発行